インタビュー

高木きよ子先生インタビュー

インタヴューにより宗教学研究室の故きを温ねるという本企画であるが、会回は高木きよ子先生にお話し頂くことになった。田丸徳善先生の主宰されている日本の宗教学研究会にお招きし、田丸先生の外、井上順孝、石井研士両氏および院生などでお話を伺った。文中Tは高木先生、tは田丸先生、Xはその他である。（編集部）

＊　＊　＊

【X】高木先生が姉崎先生と岸本先生に身近に接して感じた両先生の学風の相違を、両先生のパーソナリティーも含めて、最初にお話しいただければと思います。

【T】学風と言われると少し問題が大きくて、私にはお答えできかねる点があると思うのですが、岸本先生はある意味では姉崎先生を継承された方ですね。ですから姉崎宗教学をそのまま受け継がれて、それを体系付けられたのではないかと思われます。姉崎先生は、宗教学の骨組みをお作りになり、それの肉付けを岸本先生がされたんじゃないか。それを岸本先生は一種の使命と考えておられたように思います。

姉崎先生のことですが、私は姉崎先生の著作をすべて熟読含味したわけではないんですが、姉崎先生は東京大学の宗教学講座を開かれた方だから、その意味でいわゆるマックス・ミュラーによってつくられた新しい宗教学を日本に植え付けるお仕事があったけれども、やはり全体の傾向としてはインド哲学あるいは仏教に関する著書が多いですね。だからいわゆる宗教学一般のご著書というのはあんまりないですね。主要著作目録を見ても、やはりインドや仏教を主にやっておられて、また、『我が生涯』なんかを読んでも分かるように、それを勉強するためにドイツにいらしたわけで、その線が強いですね。これに対して岸本先生は、インド哲学・仏教の研究としては受け継がれなかったけれども、ヨーガをなさったのは姉崎先生の影響ですよね。つまり、姉崎先生はドイッセンのもとでドイツに2年ぐらいいらして、そこでドイッセンの紹介でジェームズ・ウッヅにお会いになったわけですが、そのウッヅの関係で岸本先生はヨーガをなさるわけですね。ですからその線で結び付いているといえます。ただやはり学問の時代が違いますから、姉崎先生がなさった『根本仏教』とか『現身仏と法身仏』とかいった一連の仏教研究の内容とか方法と、岸本先生のヨーガ研究の方法は違っているわけです。やはり時代がはっきり区切れたという感じがするんですが。

【t】そのことと関連してですが。僕は少し違った角度からの姉崎解釈もできるのではないかと思うのです。つまり姉崎先生は、最初はインド宗教や仏教をやっておられ、それはもちろん続いていくわけですが、ある時期以降、とくにハーバードに行って来られて以降、研究対象の面から見ると、だんだんと日本の宗教に回帰されたという見方が可能だと思います。日蓮はいうまでもなく日本だし、聖徳太子も、それからキリシタンもそうですね。日本人の宗教のいろいろな側面ではあるけれど、だいたい傾向として日本のことに戻ってきているわけです。そのきっかけとしては、やはり1913年から2年間、ハーバードに講義に行ったということが大きかったと思いますけど。

【T】姉崎先生はハーバードで日本の宗教史の講義をなさって、それで「History of Japanese Religion」ができたわけですね。そして、昭和9年に定年でおやめになってから、毎年ハーバードへ行かれるようになったようですが、それ以前からほとんど日本の宗教をしておられるのですね。

【t】岸本先生も、日本の宗教に回帰するという点では少なくともある共通点はあったと思うんです。ただ方法論ということになると、ぜんぜん違

いますね。
【Ｔ】そう、違いますよね。
【Ｘ】先程、岸本先生が姉崎先生を継承されたというお話がありましたが、岸本先生には、姉崎先生のなさった学問や領域を受け継ぐんだという意志はあったんでしょうか？
【Ｔ】それは非常におありになったと思います。まず第一にお婿さんにおなりになったこと。お婿さんになったと言うのは認められたということですし、岸本先生は、お父上の能武太さんは姉崎さんと一緒に日本の宗教学の草創期を担った方ですから、自分の親も継ぐということだったわけですね。
【Ｘ】宗教学講座の継承者としてはそうだったと思いますが、学問的にはどう結び付いていたんでしょうか？
【Ｔ】その点については、昨日少し年譜をみてみたんですが、姉崎先生はウィリアム・ジェイムズをおやりになっていたこともあるんですよね。あまり大きな論文は書いておられませんが。それで岸本先生は、ウィリアム・ジェイムズから始められた方でしょ。ですからやはり宗教心理学の点で受け継ぐという気がおありになったんじゃあないかと思いますが。先にも言いましたが、姉崎先生はインド哲学を研究しに、まあ当時の第一人者であったということで、ドイツのドイッセンのところにいらして、そこでカイゼルのことがあってドイツ嫌いになられて、晩年はずっとアメリカへばかりいらっしゃるようになったんだと思うんですが、岸本先生はそのアメリカの方を受け継がれたんだと思います。よく岸本先生がおっしゃっていたんですが、姉崎先生はハーバードをお出にならなかったけど、名誉博士か何かおもらいになってらっしゃるし、ご自分はハーバードで勉強なりＭＡをとられていますね。それから坊っちゃんもハーバードのＭＡなんですよね、建築ですけど。それで三代ハーバードが続いたといって非常に喜んでいらっしゃいました。それから岸本先生のお父上もハーバードで勉強なさって、これは裏話しですが、ウィリアム・ジェイムズからそこばくの借金をして帰ってらっしゃったんです。ジェイムズの手紙があるんですよ。それは、当時能武太さんは苦学といった感じでいらして、帰りの旅費がなくて、ジェイムズだけでなくいろいろな人から借金をして帰ってこられたわけで、それを返すために宗教学ができずに早稲田の英語の先生になられたということなのです。だから勉強だけ一生懸命にしていられなかったのですよね。昔も宗教学の場合は……。
【Ｘ】そうすると、今では講座の教授とか助教授になるというのは単なるポストの交替のような気がするんですが、昔はそうでなくて、何か脈々と流れてきたものを受け継ぐと言った意識があったんでしょうか。例えば、宗教学の場合には、親戚関係も多いような気がするんですが。
【Ｔ】私は、岸本先生以外は分かりませんが、少なくとも、岸本先生の場合にはそういった意識が非常にあったんじゃないかと思います。小口先生も、継ぐっていう意味では、東大宗教学研究室を非常に守ってらした方でしょ。とくに、宗教学は新しい学問だから、しっかりしなきゃっていうようにお考えになっていたところがおありになったと思いますけども……。岸本先生の姉崎先生に対するお気持ちは、恩師としてと岳父としてとの双方が絡みあっていたと思います。姉崎先生を大変尊敬しておられ、姉崎先生も岸本先生を頼りにしておられました。学問上の継承者としても、日常のことでも。そういう信頼関係が強かったようにお見受けしました。一方、岸本先生にとって姉崎先生はいろいろの面で重圧を感じさせる存在でもあったのではないでしょうか。

【Ｘ】そうすると、岸本先生は、戦後、姉崎先生が亡くなられた後も、ホッとすることなく。いつも頭の中で姉崎先生が大きな位置を占めていて、なかなか解き放たれなかったのですか？
【Ｔ】さあ、いつ解き放たれたのかわからないけど、やはり、姉崎先生がお亡くなりになって何年かしてアメリカへいらっしゃって、あの頃から自分もアメリカで認められてきているというので、独り立ちなさったんじゃないか思うんですが。
　岸本先生は、姉崎先生をいつも御殿町の先生、御殿町の先生といっておられました。岸本先生は御殿町のとなりの原町というところに住んでおら

れて、毎日のように行き来しておられたようでした。

【Ｘ】それは、何で行き来されたんですか？

【Ｔ】先生だから、そして義父だから。

昔は先生のお宅によく伺う習わしがありました。濱田本悠先生なども「法華」のご用もおありだったのでしょうが、かなり、御殿町へ足を運ばれていたようですよ。

【Ｘ】そうすると研究室とは別に、姉崎先生のお宅が一種のサロンみたいになっていたわけですか？

【Ｔ】サロンみたいになっていたかどうかはわかりませんが、小口先生などもお近かったし出入りしてらっしゃいました。それに昔の家は物理的に広いでしょう。今みたいに２ＤＫや３ＤＫじゃないから、人集めができたんです。使用人もいますからね。今と違って、それが当然の時代でした。また、岸本先生は親としての姉崎先生からいろいろ物心両面の援助を受けておられたと思います。岸本先生はアメリカへ行かれ、それで昭和９年に帰っていらしたが、仕事がなくって、というより、博士論文を書くために、専任職に姉崎先生がおつけにならなかったと伺ったことがあります。それで東大の講師になられたんですね。これは今でいえば非常勤講師です。そのサラリーは安いわけですよ。それから学士院で編集室の嘱託みたいなものをやってらして、そのサラリーが１００円だとうかがいました。東大の方がもう少し安かったと思いますけど。それからもうひとつ国際文化振興会の嘱託をしておられましたが。あの頃お金がなくなると父のところへ貰いにいっこのよ、って奥様もおっしゃっていましたから。

【Ｘ】ますます頭が……

【Ｔ】そう、そういった意味で御殿町の先生には頭が上がらなかったということはあると思います。だからやっぱり、姉崎先生がお亡くなりになったときに、落胆すると同時に、何か上から押さえられていたものがとれたという意識が正直いってあったんじゃないですか。例えば、それまでは論文を書かれても、全部お目通しをしていただいてたんじゃないかと思うんですけどね。私が岸本先生からうかがったことに、原稿を３度書けというのがありましてね。それは姉崎先生の教訓でね、まず一度書いて、次に清書しながらそれを直して、そして最後にもう一度清書する、つまり、必ず３度書けっておっしゃってました。

【Ｘ】そうすると姉崎先生が亡くなられて、頭の上のつっかえが取れて……

【Ｔ】それはほんとにそうかもしれませんね。

【Ｘ】…アメリカで認められてて、ようやくこれからっていう時に癌の宣告を受けられたわけですね。

【Ｔ】ですからあの時代を歩んでるとわりと長いような気がするけども、岸本先生の活躍された時期っていうのは、現在客観的に見ると非常に短いですね。２０年でしょ、昭和２０年から昭和３９年まで、それでそのうち１０年が癌ですね。

【Ｘ】日本の宗教学を作るという意識が姉崎先生に認められるのかどうか、またそれは岸本先生ではどうか、という点についてはどうでしょうか？

【Ｔ】「日本における」宗教学を作るということでは姉崎先生も岸本先生も同じではないかと思います。が「日本の宗教」を対象とするということですと姉崎先生についてはご自分のなさった事としては、さっき田丸先生もおっしゃったように、後のほうで日本のことをしてらしたんですが、日本の宗教学を作ると言う意識でなさっていたかどうかね…。むしろ私の印象では、私達の頃は、宗教学っていうのはだいたい西洋でしたよね。日本のことをやってるのは駄目だっていう感じの雰囲気でした。つまり、姉崎先生の時とは別の意味で、戦後、主としてアメリカを経由した新しい人格心理学だとか文化人類学だとかが入って来ましたでしょ。それもあったせいか、西洋のことをやるのが普通といった傾向で日本のことをするのは肩身が狭いっていう雰囲気がありました。だからむしろ、日本を対象とする宗教学を確立されたのは堀先生あたりからじゃないんですか。まあ、岸本先生がそういうことをお考えにならなかったとはいいませんけれども。

【ｔ】比較的に晩年といっていいでしょうけど、ある時期の岸本先生については、宗教学－と言うよりもむしろ、その背景をなしている宗教観－と

いう点で、日本あるいはもっと広く東洋的な見方のほうが、ヨーロッパ的なものよりもより大切だという意識がかなり強かったんじゃないか、とくに最後の何年か、それはだんだん強くなったんじゃないかと思うんです。

【Ｔ】それはそうですね。

【ｔ】今でもはっきり覚えているのは、１９５９年だったと思いますが、岸本先生がユネスコのプロジェクトで、ヨーロッパ各地で日本の宗教について講演旅行なさってたときのことです。たまたまドイツに居たので、そのお供をして二人で十箇所ぐらい歩いたんですが、そのときつよく感じたのがそういうことでした。

【Ｔ】それは、外国で日本のことをお話になる機会があたえられ、丁度国際的に日本が伸び出した時代ですから日本を外国に知らせる、そういう使命をもたれたのだと思います。英語がおできになるし、あの国際宗教学会議のあとでしたし。

【ｔ】ええ、外的な契機としてはそういうことだったと思うんです。

【Ｔ】そうすると姉崎先生も同じですよね。

【ｔ】結局そうだと思います。

【Ｔ】ただ、学問としてそういったことを表立って問題にしなければならない時代ではなかったのではないかと思うんですけど。

【Ｘ】姉崎先生は調査はなさっていないですよね。アンコールワットへ行かれたのも、見学であって調査ではないですね。

【Ｔ】そう、厳密な今のような調査はなさってないですね。

【Ｘ】キリシタンの研究も実際には調査でなくて文献研究ですね。これに対して、集団での、しかも自発的な調査が始められたのは、岸本先生の山岳宗教の会だと思うんですが、岸本先生の宗教調査というのは、どのように組識して、どういう風に現地へ行って、どう宗教現象を見てきたんでしょうか？

【Ｔ】最初は昭和２６年に、大神神社に行ったんですね。どうして大神神社へ行ったかというと、一つには、御神体が三輪山であるという、珍しい山岳宗教の形態のところだからです。丁度その頃ＧＨＱから神道指令が出て、方々の神社が岸本先生のところに何かと相談にきてたんですが、その中に大神神社の宮司さんもいらして、そういった関係でまず大神神社へいくことになったんですね。私はＧＨＱに提出する文書をタイプさせられたんで、よく覚えているんですが。また、組織といっても、別にどうということでなく、当時、日本の宗教をしておられた野田（幸三郎）さん、実態調査をしておられた高木宏夫さん、そして私ぐらいが最初のメンバーでした。その時は調査では仕事を分担したんです。聞き込み調査をやる人とか、文献をやる人とかね…。ですから、現在みたいに組織立てられた調査ではなかったと思います。アンケートにしたって、当時ですから手書きみたいなものでしたし、大神神社の資料を見せていただいて、私と野田先生で写すとかね。それから、三輪信仰がどういったように広がったかを見るために近くの摂社・末社を見たり……だから今の調査に比べると本当に簡単というか、平面的なものでした。

【Ｔ】この調査には、岸本先生の御尽力でロックフェラーからお金が出たんです。のちに文部省の研究費もとれるようになりました。そこで調査も本格的になり、メンバーも、リーダー格として堀先生・池上先生が加わられ、柳川先生はじめ、松本皓一さん、土屋さんその他いろいろの方が参加され、場所も方々に行きました。この調査がどの程度完遂されたかは別として、まあそんな感じだったと思います。それから、シカゴで山の調査について発表するはずで原稿がほぼできたんですが、結局岸本先生がお亡くなりになって取り止めになってしまいました。この発表というのは…ロックフェラーからお金をいただいてましたから…その関係でね。一応日本語で発表することも考えておられたけれども、日本の宗教を外国に向けて紹介するということでまず英文でね…。それで、三輪山を何回かおやりになって、その後木曽の御嶽山とか出羽三山をおやりになったのですね。戦前には岸本先生は一人でやっておられたわけでしょ。

【Ｘ】ええ、戦前からやっておられます。

【Ｔ】修験道をなさったのは、ヨーガの修行から

きでるわけで、それを日本に当てはめてみようとなさったと思うんですが、一つは、『出羽三山を中心とする宗教的修行について』っていう論文を、帝国学士院にお出しになったのが昭和１７年で、これは学士院の奨学金のようなものが出たんで、それの一つだったんですが、私はこの仕事で初めて岸本先生や姉崎先生を知るようになったんですが、姉崎先生はこの時に帝国学士院の会員で、編集委員長をしておられ、英文のＰroceedings という紀事を出していらして、その和文のものが昭和１７年に初めて出たんです。これ以外にも山岳修行の論文がいくつかあります。おそらくは、ヨーガの修行との関係で、日本で修行と言うと山伏と言うことで始められたんだと思います。実際に山伏の恰好をしてとった写真がありますでしょ。

【Ｘ】戦前からやられてたのは個人でおやりになってたわけですよね。

【Ｔ】ええ、そうです。

【Ｘ】それが戦後集団になったというのは、そういったことをやろうとしている学生が多く集まってきたからですか？

【Ｔ】そういうわけでもなかったと思います。岸本先生がたまたまやれといわれただけで、ほとんどの人は関心を持ってないっていうか…。それからその時は学生さんレヴェルではなく助手さんレヴェルでしたね。だから、岸本先生のことだから計画はちゃんとおありになったでしょうけど、最初から非常に遠大なことをお考えになっていたというよりも、始めてからだんだんに広げていったって感じですね。

【Ｘ】あの頃の池上先生の手帳を見ると、ものすごくまめに研究会を開いて、頻繁に調査に行っておられるんですよね。

【Ｔ】それは文部省からお金を貰ってたから、成果を出さないとということもあって…

【Ｘ】本当に頻繁に研究会をやっては、調査に行ってられるんですよね。岸本先生がどうしてあの時期５年くらい、あれほど情熱的にやられたのか、そのへんがどうも飲み込めないんですが。

【Ｔ】それはね、客観的に見ると飲み込めなくなっちゃう点があるけれども、あの当時の先生の研究の中心だったんです。それにやってる主体者はね、何か面白くてやっちゃうっていう、今でも自分達の行動でそういうことってありますでしょーそんな感じでしたね。それが意外に歴史的に評価されると変に方向づけられてしまうってこともあるけども、みんな非常に楽しくやってましたよ。誰も嫌だとはいわなかったですものね。変な言い方ですけど仲間が割合に良かったというかね。

【Ｘ】それは、やはり、研究法の大きな転換点だったわけでしょうか。無意識だけを問題とするというのから、生きた人との面談を取り入れるということで…。それ以前にはそういうのはなかったんですか？

【Ｔ】そう、なかったというか…例えば岸本先生はジェイムズをなさった方でしょ。それで手記的資料による研究に関心があったんですよね。しかしそれでは直接的なものにならないというので、また、同時に、宗教学だけでなくて、社会学だとか人格心理学だとか外国のものがいろいろ入ってきてますでしょ…それでやられたんだと思いますけれども。

【Ｘ】今日のような参与観察というのは当初から考えられてたんですか、それとも、やってるうちに、やはりやらなきゃならないというんで始めたんですか？

【Ｔ】いえ、はじめの頃は、現地へ行って、この目で見ろということで、どれがだんだん新しい調査の方法が入ってきて、自然そういうものに影響されて…と、いろいろの要素があったんですね。

【Ｘ】そうするとやはり、やっていくうちに、何かを見て、結果的に道が見えてくるといったことだったんですか？

【Ｔ】それは当然あると思います。昭和２５年に、岸本先生が、ガリオアか何かで、５人くらいの仲間でアメリカに調査にいかれて、その時に、新しい本をどっさり買って帰ってらしたんです。例えばその中にオルポートが大学生の調査をやった資料があって、それをもとにしておまえやれといわれて、私は昭和２５年の夏にそれを翻訳して、それで大学生の意識調査をやったんですね。それをやったから私は山の調査へも連れて行ってもらえたんだと思います。大変でした。男の人ばっかりの中で……。

やはり、実態調査というのが、宗教学だけでなくその頃の人文科学の全体の傾向だったと思うんですね。心理学にしろ社会学にしろ文化人類学にしろ、昭和２０年代いっていうのは、全体の傾向が実態調査に向かってきた時代でしょ。でも、岸本先生がいわれたことで、はっきり覚えてますけど、調査は若いうちだけでやめなさい、ずっと年をとるまでやるものじゃないと、ある程度調査をやったら後は思想にいきなさいと…いつも調査へ行く度にそうおっしゃってました。

【ｔ】それはどういう意味でしょうか？

【Ｔ】結局それは、一つには岸本先生は、どちらかというと思想の面を深くなさる時間的余裕がなかったからということもあると思います。また岸本先生自身、調査を本格的に始めていらっしゃるのが、５０歳近くからですからね。だから、そのままでいてはいけないっていう戒めだったと思います。ただ始めから文献的なことばかりをやるよりは、実態調査をしろということもいっておられたし、つまり、両方必要だってことだと思います。

【Ｘ】例えば岸本先生が、ご自分で山を歩かれていろいろと体験される中で、やはり宗教を研究するために、あるいは理解するためには、追体験とまではいかなくとも、ある程度現場へ行って見てみなくては駄目だという考えがあったんでしょうか？

【Ｔ】ええ、岸本先生は経験主義者で、つまり、ある意味でプラグマティズムでしょ。だから、経験がものをいうという面が非常に強かったですよ。だからああいった調査ができたわけです。そうじゃなかったら大変ですよ。当時はいろいろと周りからずいぶん白い目で見られましたからね。しかし、当時批判的だった方ものちに調査をしておられるし……。

【Ｘ】成果は別として、大きな影響を後世に与えたということですね。

【Ｘ】宗教調査といっても、テル・ゼロールと山の会の調査では、やはり、全然性格の違うものだったんでしょうか？

【Ｔ，ｔ】違いますね。

【Ｘ】発掘と言うのは、我々はしたことはないんですが、あれは全く違うものですか？

【ｔ】人間が相手じゃなくて、物が相手だから、いわゆる実態調査とは違いますね。

【Ｘ】当時山へ行ってインタビューした場合に、受け手の側というのは、フランクに答えてくれたのでしょうか？

【Ｔ】二通りあったと思いますね。我々に抵抗があってそっぽを向いてしまうというのと、学者先生が自分達のところへきて話を聴いて下さるというので答えてくれるのと…。最初、大神神社に行った時に、『大和タイムズ』に東大から調査にくることを「お山にメス」って書いてあったんですよ。当然そこには冷たい目っていうのがあったわけです。

【Ｘ】山の会は、ずいぶん長い期間やられたし、また、多くの先生が関与されたんですが、その割りには、先生はもちろん論文を書かれているのですが、それほど膨大な数の報告書があったようには思えないし、少なくとも一冊の本にはまとめられていないのですが、それはなぜなのでしょうか？それは宗教学の特性なのでしょうか？

【Ｔ】そう、宗教学の特性がひとつーいみじくもおっしゃったから…。もうひとつはね、岸本先生が忙しすぎたということでしょうね。最後にとくに残念だったのは、ロックフェラーからお金を貰っていて、そのために報告書を出す義務があって、英文の原稿のメモができていたんですが、結局、岸本先生がお亡くなりになってそれも発表されなかったし、堀先生は東北大へ行ってしまわれたし、それから、池上先生は慎重な方で、つまり論文はたくさんお書きになっているけれども、本にまとめようということは、少なくとも第一義的にはあまりおやりにならなかったですね…これは宗教学の伝統ですね。つまり、しないという意味ではないけれども、ただ、早急にまとめてしまわなきゃならないというのでなく、十分にやってからでいいのではないかというタイプの方で…そしたら、そのうちに亡くなってしまわれて…。

【Ｙ】耳に痛いですね。

【Ｘ】昔、柳川先生がお書きになった『宗教学ゲリラ論』の最初に、宗教学者の特徴として、興味が広すぎて、すぐに関心が移っていくので、なか

なか論文が書けないという内容のことが書かれていますが、やはりそういった雰囲気は岸本先生にもあったのですか？

【Ｔ】関心が移るということが岸本先生にあったかどうかは知りませんが、少なくとも、岸本先生に教えを受けた我々の世代には本がなかなかまとめられないという雰囲気はあったんじゃないですか。もう少しあとの世代の方々は、どんどんいい本を書いておられますね。やはり、それまではね、皆さん論文はお書きになっても、それを本にはあまりしないという伝統がありましたよね。それが良いことか悪いことかは知らないけど…。

【ｔ】ここで、姉崎先生の自伝を筆記された時の話をお聞きしたいのですが。

【Ｘ】たしか『時と人と学と』を読むと、半年ぐらいの間、毎週末熱海へ通われたということですが。

【Ｔ】新幹線があるわけじゃないし、大変でした…だから一晩泊まりか二晩泊まりで…。でも、私が非常に幸せだと思ったのは、姉崎先生の最晩年に、個人的に接することができたということです。仕事自体は少し大変でしたけどね。先生がお話になるのを私がノートに書いたんですが、どんどん喋り方が速くなるんですよね。姉崎先生は私の父親の世代だし、－本当は優しい方だったんですが－私の父がこわかったので、その同世代の人は全部こわいという印象が強かったものですから、今の方だったら、「先生、もう少しゆっくり話して下さい」なんていうんでしょうけどね、そんなこと口が裂けてもいえなかったですね。

まず、朝、東京を出てお昼頃に着くんですよ。それで午後２時間ぐらい口述をやって、それを私が夜清書して、そして、また明くる日別の話をやって、それを東京へ持って帰って清書して…という感じでしたね。そういった中でひとつ目についたのが先生の日蓮信仰で、お寝みになる前と朝に仏壇の前で必ず法華経を読んでらっしゃいました。私はその場にいてもいなくてもおかしな感じがして、最初は、先生と奥様の後ろに座っていたんですが、そしたら、姉崎先生が「御前は日蓮宗の信仰を持っているわけでないから自由にしなさい」とおっしゃって、それで私はホッとして、それからは階下の私の泊まる部屋に降りていたんです。

【Ｘ】どれくらい読んでらしたのですか？

【Ｔ】その頃私は法華経についてもあまり知らなかったけど、きっと二十八品を一品くらいずつやってらしたんでしょうね。とにかく一時間ぐらいやってらしたですよ。本当に晩年の日蓮信仰というのは大変なものでしたね。

それから、ここに持って来たのが『聖徳太子の大士理想』と言う英文のもので、これはちょうど終戦後、国際文化振興会から出版されたんですが－私は帝国学士院でも姉崎先生の下で「学士院紀事」をお手伝いしてましたが、直接の仕事はこれが初めてでした。

【Ｘ】姉崎先生の家のつくりはどうだったんですか、例えば、本などはどうおいていらしたんですか？

【Ｔ】姉崎先生のお宅に関しては－私はお二階の書斎のような所に上がりましたけど－本が一杯あったと言う印象しかないですね。御殿町のお宅には一度くらいしか伺ってないものですからはっきりとは分からないですね。岸本先生の原町のお宅の場合は、８畳くらいの部屋の中央に机というか卓がおいてあって、あと畳の上に全部本がおいてありました。私は本は本箱にいれて、つまり縦におくものだと思っていたので、それは考えられないことでした。多分、姉崎先生の所もそうだったんじゃないですかね。

【Ｘ】壁に本箱はなかったんですか？

【Ｔ】いえ、もちろんあったんですが、それはすでに一杯で、あと畳の上に一面においてあったんですよ。かなり蔵書がおありになったようですね。

【Ｔ】姉崎先生のことでもう一つ気になることがあるんですが…。小口先生にこの事をよく伺っておけばよかったんですが。

【ｔ】何ですか？

【Ｔ】聖徳太子の画像が、熱海の姉崎先生のお居間に飾ってあったんです。それでそこに、何て書いてあったかは忘れたんですけども、何か字が書かれていたんですよ。それは、聖徳太子の字を集めてプリントみたいにされたものだと聞いたこと

があるんですが。

【Ｘ】それは、座右の銘みたいなものですか？

【Ｔ】さあ、座右の銘というより軸の讃だったように思うんですが。それで田村芳朗先生もたしかお書きになっていると思いますけど、姉崎先生は、日蓮の信者でいらしたから、日蓮の信仰が非常にクローズ・アップされているでしょ、で、私は意外に、その基に聖徳太子に対する信仰とはいえないかもしれないけど、そういったものがあると思うんです。晩年には、法隆寺の佐伯定胤先生とも親しくしてらっしゃいましたしね。また、聖徳太子奉賛会の会長などもやってらしたし、そういったものをどこまで信仰と呼べるのかは分かりませんが太子に対する思いがかなり強くあった気がします…つまり、日蓮信仰とは別な意味で。というのはね、確か日蓮の画像は目につくところにはなかったと思うんですよ。日蓮のは戦前、御殿町にあって、焼けてしまわれたのかもしれないけれども、聖徳太子のは熱海にあったんですよ。

【ｔ】この前少し年譜を調べてみたんですが、発表された論文のテーマでも、日蓮とほぼ同時代か、前後するくらいの頃から聖徳太子についてのものが出てきています。

【Ｔ】『聖徳太子と日蓮上人』なんていうのもありますしね。

【ｔ】そう。かなり早い時期から出てくるので、これはわりと一貫してるなという印象を持っているんです。それで、それをどう解釈するかということですが、ある意味で、太子と言うのは日本仏教の出発点ですから、そういうところに結び付いてくるのかなという気がしますけど。

【Ｘ】ナショナリストということですか？

【ｔ】ナショナリストといっても、あまり政治的な意味でなくて…

【Ｔ】ナショナリストではないですよね。高山樗牛が国粋主義的な会を作った時に、一方で、丁酉倫理会と言う自由主義的な会があって対抗していたわけですけど、そのうちに樗牛は元の国粋主義的な会を抜けて丁酉倫理会に来たわけです。それから樗牛と親しくなったんですね。で、姉崎先生の場合、日蓮信仰っていうのはほとんど樗牛の影響ですからね。ということはかなり後年になりますね。まあ、以前から興味は持ってらしたと思うけど信仰としてはね。それまではお家が仏光寺派の絵をかくお家だったから、真宗の流れはあったといってらっしゃるけど、とくにこれを信仰してたってわけじゃないですね。

【Ｘ】インターナショナルなナショナリストという感じですかね。大本などもそうですよね。つまり、日本の時代的な要請があったと思うんですよ。学者といえども、それを逃れられないわけで…。

【Ｔ】そういう意味では、たしかに聖徳太子と日蓮は結び付くかもしれませんね。…とにかく時代が違うんですよね。姉崎先生はずいぶん色々な方面のお仕事をなさったけれども、今のように忙しくなかったですよね。今は忙しいでしょ。

【Ｘ】時代が忙しいですからね…。

【Ｔ】たくさん本の読めた時代ですよね。テレビもなかったし、プロ野球もなかったし、…。

「山の会」第一回三輪山調査（昭和27年）
左より　高木宏夫、野田幸三郎、高木きよ子
岸本英夫、一人おいて、中山和敬の各氏